

トランプ大統領はどこう動く?

トランプ新大統領は就任後どんな政策を打ち出すのか。選挙期間中の過激な発言から、政財界では不安視する声が多い。「同じ実業家として信頼している」と話すのは日本貿易会の小林栄三会長だ。

実業家であるトランプ氏がリーダーに決まったという期待感が込められて、足元が株高・円安になっているのは面白い動きだ。

ただ、世界経済全体の流れは大きくは変わっていない。何となく悪くはないけどすっきりしないというのが現状で、少なくとも2016年の世界経済の成長率は3%前後だろう。中長期的には、来年の就任以降、トランプ新大統領が実際にどんな政策を取るのかにかかってくる。

彼がよく言う「deal」という表現に代表されるように、トランプ氏はすべてのことについてそれが米国のためになるか、ならないのかという議論をするだろう。

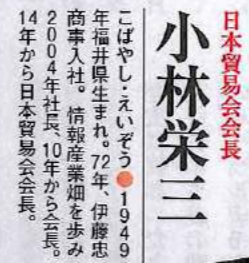
とはいえトランプ氏は11月8日に当選してから、現実路線に舵を切りだしている。移民の問題にしても、まだメキシコとの国境にフェンスを作ると発言しているが、同時に周りをしながら政策を作ろうとしている。好き放題、飛んではねての、あの選挙のときのイメージはもうないと思う。

実業家としてのトランプ氏は歓迎する

もちろん、まだまだ新大統領からのアウトプットは少ないし、就任時にどんな話をするかわからない。紆余曲折があるかわからないが、ウイン・ウインの関係構築するのではないか。何しろ彼は実業家。実業界の人間というのは夢だけでは食えないから、間違いなく現実立脚した施策をやっていく。実業界としては、トランプ氏を歓迎する。

日本貿易会が懸念しているのはTPP(環太平洋経済連携協定)の行方

だ。日本は明治以来、貿易立国で成り立ってきた。国の発展にはTPPが必要という思いが非常に強い。商社をはじめ産業界にとつていちばんいいのは、人・モノ・カネ・情報が自由に行き来する世界だ。それが全部遮断されてしまうと、一つひとつのビジネスの規模が小さくなり、相乗効果を生み出すのは大変だ。



日本貿易会会長
小林栄三
こばやし・えいぞう 1949年福井県生まれ。72年、伊藤忠商事入社。情報産業部を歩み、2004年社長、10年から会長。14年から日本貿易会会長。

米国抜きでのTPPは到底考えられない

今は(TPPからの離脱を主張する)トランプ氏がどう動くかわからない状況だが、米国にとつてTPPが本当にマイナスイカ、プラスか、いずれ理解してくれると思う。NAFTA(北米自由貿易協定)にしても、オバマ大統領は選挙期間中には「見直す」と発言したが、結局は見直されなかった。今回の大統領選挙では感覚的に「モノづくりの仕事が奪われた」などマイナスの側面ばかりが強調されたが、本当にそれがマジヨリテイの

意見か、共和党や官僚のプロにインプットしていただいて冷静にお考えいただきたい。そもそも日本がTPPの検討を開始したのは、米国の誘いがあつたら。日本では知られていなかった09年当時、TPPのことをよくジョン・ルース駐日大使に説明してもらったものだ。それからこれだけの時

衆議院議員 長島昭久

ながしま・あきひさ 1962年生まれ。慶応大学大学院修了。ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院修了。



撮影: 今井麻一

「力による平和」を追求しレーガン流外交の復活か

間をかけて12カ国が大筋合意に至った。「さあこれから」というときに、すべてが崩れるとなると日本もいろいろ考えないといけない。政・官だけでなく民もいろんな場で話したい。われわれには貿易立国を引っ張ってきた自負がある。保護主義にならないことが世界に必ずメリットをもたらすと思う。

トランプ氏側近とされるマイケル・フリント元陸軍中将と10月に面会し、今後のトランプ外交・安全保障政策の行く末を占うのが、外交・防衛通として知られる民進党の長島昭久衆議院議員だ。

選挙結果は衝撃的だったが、その後の言動を見ると、なかなかの人だなどという印象だ。逆に、トランプ氏の言葉を信じて投票した人が、トランプ氏の現実路線への転換を許容するの心配になる。何を切つて何を残すべきか。ビジネススマンとして、彼が培ってきたすべてを今フル回転させているのだと思う。

トランプ氏が自らの政策を修正したとき、トランプ氏を押し上げたうねりとどこまで整合がとれるか。うまく統治していくには、それくらい変身しないといけないかもしれない。現実路線にうまく転換できれば2年後の中間選挙、4年後の再選も見てくる。

今年訪米した際に聞いた、トランプ氏をよく知るある専門家の評価は、クリントン氏はストラテジック(戦略的)。対するトランプ氏はトランプサクシヨナル(取引的)だと。トランプ氏はまさにディーラーで、それが外交に転用されると大変なことになる。内政を重視して外交はきちんとし

日米同盟再構築を要求

11月に出た外交専門誌に、トランプ氏の外交アドバイザー二人の書いた論文が載っている。私もすぐに読んだが、「ピース・スルー・ストレンジス」、つまり「力による平和」という言葉がタイトルになっている。これは誰が見てもレーガン時代の言葉で、トランプ氏自身もスタイルとしてはレーガン氏のようなことをやりたいと思っているのではないかと。力による平和という言葉は、いわば現代共和党の原点だ。

レーガン氏は家族の価値だとか、古きよき米国の倫理的部分をすごく強調した。トランプ氏はそういうものを全部ぶったぎって、今さらレーガンかよ、となるかもしれない。だ

から、トランプ氏がレーガン氏のようになるかはわからない。前述の論文はオバマ氏とクリントン氏のやったピボットやリバランスは表面的なもので、実態を伴っていないと指摘している。今の海軍力は第1次世界大戦以来最低、今の陸軍力は第2次世界大戦直前以来で最低、今の空軍力は創設以来、つまり戦後最低、そして、今の即応体制のレベルはここ20年で最低だといっている。それを事態の伴ったものにするという内容だ。

もう一つはロシア。日露関係が進展する可能性はあるが、オバマ政権は何度か懸念を表明した。フリン氏は日露関係の改善はいいことだが、ブーチン氏は一筋縄でいく男ではない、と。三つ目がTPPの話で、トランプ氏はマルチ(多国間)の交渉は信頼していない、と話していた。